



「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 8 月 11 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	川口ゆり

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)	
シカゴ、アメリカ合衆国	
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)	
Chimp in Context, IPS 参加	
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)	
平成 26 年 8 月 17 日 ~ 平成 26 年 8 月 29 日 (13 日間)	
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)	
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)	
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。	
<p style="text-align: center;">日程</p> <p>8 月 17 日：移動 8 月 18 日 - 20 日：Chimp in Context への参加 8 月 22 日 - 26 日：IPS への参加 8 月 27 日 - 29 日：移動</p> <p>今回の渡米の主な目的は Chimp in Context および IPS へ参加すること、特に IPS で以下のポスター発表を行うことであった。 発表タイトル：DOES THE ABILITY TO DISCRIMINATE AGE CATEGORY IN CONSPECIFICS TRANSFER TO OTHER SPECIES IN CAPTIVE CAPUCHIN MONKEYS (<i>Cebus apella</i>)? 著者：Y. Kawaguchi, H. Kuroshima, K. Fujita</p> <p>国際学会での発表は初めてであり、また IPS は 2 年前ハノイで開かれた際、非常に参加したかったので今回の参加は楽しみにしていた。さらに、シカゴは私にとって特別な場所であった。というのも、1 年半前、松沢先生のリンカーンパーク動物園視察に同行させていただき訪れていたからである。その際は Ross 先生が案内くださり、日本モンキーセンターから移ったニホンザルの展示を紹介していただいたり、大型類人猿舎の関係者しか立ち入れない観察スペースからじっくりゴリラやチンパンジーを見せていただいたりした。工夫が凝らされた素晴らしいニホンザル展示や若いゴリラが何個体も遊んでいる様子が非常に印象的で、彼らに再び会うことも心待ちにしていた。今回は、前回ほとんどできていなかったニホンザルのタッチパネル課題がどのくらい進捗したか実験の様子を見ることができなかったのは少し残念だったが、ニホンザルはやはり来園者にも非常に人気のようであった。また、前回生後 1 か月のゴリラがいたが、今回同一と思われる個体はかなりしっかりと顔つきになっていた。</p>	
	
ニホンザルの赤ちゃん@リンカーンパーク動物園	リンカーンパーク動物園

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



2015年3月に撮影した生後1か月のゴリラの赤ちゃん

@リンカーンパーク動物園



今回撮影したゴリラの赤ちゃん。左の個体と同一個体と思われる@リンカーンパーク動物園

肝心のシンポジウムのほうもかなり長丁場であったが、面白かった。たまたま話をした方も米国南部の動物園関係者であったが、動物園関係者が多いというシンポジウムの性格もほかの学会などとは変わっていた。これだけの人が霊長類にかかわっているのだと思った。ポスター発表がタブレットとモニターを利用したE-poster という形式であったのが斬新だった。



Chimp in Context の会場



E-Poster 発表。類人猿舎で行われた



会場エントランスにて

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

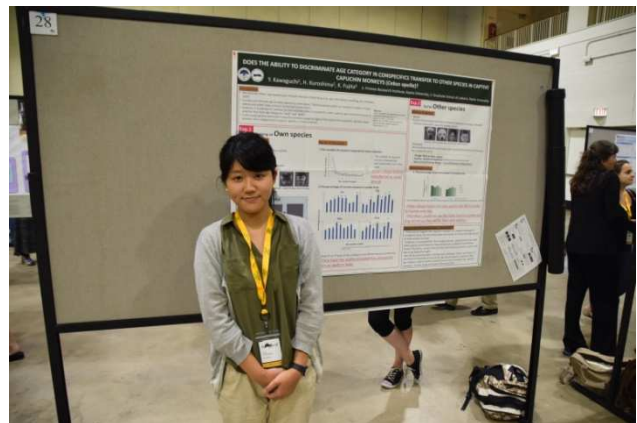
IPS では自分の発表には2時間の発表中7, 8名の方が聞きに来てくださり、そのうち半数ほどが海外の方であった。今回のポスター発表に際しては、事前のCIGASPセミナーで希望して発表練習を行わせてもらい、たくさんのコメントをいただいてデザインを直前に大きく変更した。その結果、かなり見やすくなったと数名に言ってもらえたのでそのような機会をいただけたことに感謝している。実際の発表では来ていただいた方にはきちんと伝えたいことを伝えられたように思うのでその点は満足だった。一方で、そのなかに認知系の研究者はあまり多くなく、それほど議論が深まらなかったのは少し残念でもあった。今回のポスターセッションは19時から21時とかなり遅く、人の出入りの多い非常にオープンな場だったので日本霊長類学会のような国内学会とは異なり、ポスター発表の場に(学生ではなく)研究者が長時間滞在して発表を回るとは考えにくい。また会場もかなり広いホールでかつ飲食物が供されたので騒がしく、発表を行うのが難しかった。しかし、そのような場でも常に人がいるようなポスターもあったのでどのようなコンディションでも人をひきつけるような研究、またその見せ方を磨きたいと思った。

オーラルセッションに関しては認知系のセッションを中心に参加したが、研究に少し偏りがあるように感じた。多くの研究が協力や利他行動を中心としており、特にprosocial, selfishというワードは聞き飽きるほどに登場した。私自身、熊本サンクチュアリでボノボを対象に協力実験は行ったことがあり、協力行動には興味がある。多くの先行研究の実験場面においては「協力」するのが唯一の報酬を得る手段であることがほとんどなので、ヒト以外の霊長類で行うとされている協力は今のところ社会的な道具利用と区別できないような側面もあると思う。そうではなくて、一人でも持てる机を二人で運ぶというような、必ずしも協力が必要でない場合の行動はどうであるのか。そういうことを個人的にずっと考えてはいる。しかし、協力は今盛んに議論されるトピックではあるが、学会にこんなにたくさんの研究結果が集まるということは、ある程度研究がおこなわれてしまっているということと裏表であると思うので、自分は他のことをやりたいというようにも感じた。他に興味を持ったセッションとしては、チンパンジーも料理をするのかについて調べた実験に興味を持った。しかし、実際は「サツマイモを実験者が参加個体から受け取りボールに入れて振り、あらかじめ火を通したサツマイモを渡す」というトークンに似た実験場面だったのでそれを料理といってよいのか疑問に感じた。また、野生下で孤児となったゴリラを対象にした研究も面白く、そのうち数個体は母親の移籍が原因と知り驚いた。

知識を得ただけでなく、ほかの人と話せたこともよかった。他研究所の若手研究者たちと出かけた夕食では、興味のあるトピックが共通しており議論が尽きなかった。また、熊本でお世話になった Seres 氏と再会し、新たなプロジェクトの話などを聞いたのも楽しかった。



IPSの会場：ネイビーピア



ポスター発表

今回の旅程は10日間と比較的長かったが、総じて有意義だった。毎回そうであるが、学会に参加することで、自分も早く研究を進めたい、と、モチベーションの向上にもつながった。この気力を保って今後の研究の推進力としたい。

6. その他 (特記事項など)

本シンポジウム・学会への参加はPWSの支援を受けて行いました。ここにお礼申し上げます。